

秋田県内出土手取釜の二例

＝秋田市飯島穀丁出土の保存処理鉄器をふくむ＝

庄内 昭男*

1. はじめに

中国で行われていた茶の湯の作法が本格的に日本に入ってきたのは、鎌倉時代であり、はじめは禅宗寺院の修行の中にとりこまれていた。中国留学後に帰国した僧栄西が三代將軍実朝に喫茶の効能を紹介したことで、武家社会へ急速に浸透していったことが知られている。

ところで、秋田県では中世の文化財に関わる情報が極めて少ない状況にあって、これまで城館跡から出土した青磁碗の存在が、茶の湯との結びつきを示唆する一面をもっていると考えてきた。秋田市飯島穀丁ではその青磁碗と合わせて茶臼や鉄釜が出土しており、茶の湯道具のセット関係が認められた唯一の例となっている。2002年、この出土した鉄釜を保存処理したことで形状が分かり、手取釜であることが確認された。また、これまで工芸部門の資料であった、湯沢市牛形城跡からの出土記録がある手取釜についても中世のものであることを確認した。合わせて資料紹介することで、茶の湯が武士階級や地方へ浸透してきたことを語る手がかりになるものと考えた。

2. 秋田市飯島穀丁出土の鉄製品

かつて当館研究報告7号において、穀丁のマンホール工事で青磁碗や茶臼などが出土した経緯を報告してから、26年を経過している。その中で鉄釜とだけ記載していたものについて、2002年に保存処理を終えたことから、ここに観察結果を表しておく。なお、穀丁出土資料については、この鉄釜、青磁碗をふくめて一括して県指定有形文化財となっているが、鉄塊とだけ記して、これまで報告していなかったものについても保存処理が完了したので、あわせて紹介する。

○手取釜

鉄釜としてきたが、とくに底の部分の腐食が最も進行したため、底部は樹脂を充填して強度を保

っている。本体に蓋と取手が付属していたものである。各部位毎に法量や観察した事項を記す。

－胴体部－ 腐食が進行した上に、土圧でゆがんだせいもあって形状は原形を保ってはいなかった。保存処理は京都府の吉田生物研究所に依頼し、合わせて破片をつなぐ修復作業が行われた。胴体部は鋳型によって製作されたものとみられる。壺形を呈している。中央が最もふくらみ、下半部と明瞭な段差があって、庇のような稜となっている。釜口の径は15.5cmで、口造りは短く立ち上がる甑口で、口唇の高さが1.5～1.7cmである。釜口をはさんで取手をかける突起が対となっており、幅21cmを測る。底部には幅1cmの足が付いており、一足だけが残っていた。その足の位置から三足であったと推測された。

－蓋－ 直径が18.7cmである。先が折れて口に深くかぶさるようになっている。表面に三条を単位として二重に条線が巡っていたようである。中心につまみがあり、中央に貫通する孔をもっている。孔の直径は0.5cmである。

－取手－ 断面は四角で、帯状の鉄板を畳みこんで、半円状の取手としている。中央で幅が太く長辺が1.2cm、両先端が0.5cm前後細くなっている。遺存した部分は釜口より狭くなっているが、先端が少し広がって、突起に取り付くものと思われる。

○他の鉄塊について

鉄塊の形状は台形を呈していたが、保存処理によって一つの鉞と二つの刀子片が付着していたものであることが確認された。

－鉞－ 刃部に柄が付着した状態で残っていた。全長は30.3cmである。木製柄に先がとがった基部がはまり、刃部と木製柄の境に環状の金具が付いている。刃部の最大幅は4.7cmであるが、いわゆる鋭角となる刃をもっていない。

－刀子－ いずれも刀子の基部である。1は、曲げ刀子の基部であり、長さが10.5cm残っている。

* 秋田県立博物館

2はその基部に木質が残っており、長さは9.2cmである。

3. 湯沢市牛形城跡出土の手取釜

博物館の設立準備を進めていた昭和46年に地元好事家から購入した資料の中にあつたもので、当館の工芸部門で収蔵している。

<出土地> 牛形城跡は、湯沢市大館字館に所在している。成瀬川と皆瀬川の合流点から南東に3km離れた低い山地に位置している。大倉山の標高324mの頂上部に主郭をおき、西に向けて二ノ丸、物見台の順に下っている。それぞれが南北に入る空堀と土塁によって区切られている。大正末年に沢から明・宋銭が発掘されているとのことである。なお、釜の採集位置については不明である。

—釜の観察— 胴体は壺形を呈している。体部中位が最もふくらみ、直径20.5cmである。そのふくらみが稜となっており、下半部との段差が0.3cmである。釜口の径は11.5cmで、口造りは短く立ち上がる甑口で、口唇の高さが0.8cmである。口縁から底部までの高さは11.5cmである。体部上位に注口がつき、取手をかける突起の位置は、開口部をはさんで幅17.5cmである。その突起には中央に大きな穴があり、その両側に二つの小さな穴が付属している。なお口唇に比べて注口が1cm、取手が1.5cm前後高くなっている。底部に取り付く足は三足であり、高さ1.5cmほどであったと見られる。二足は体部に取り付いたままであつたが、1足は補修した痕跡があつた。なお、裏返した底部の中央に丸い高まりがあり、湯口の痕跡が残つたものである。さらに鑄型の痕跡は、注口の中心が稜となつて残っている。

なお、表面の一部に長さ3cmほどの漆が付着していたことから、表面を漆塗りしていた可能性もある。

4. まとめ

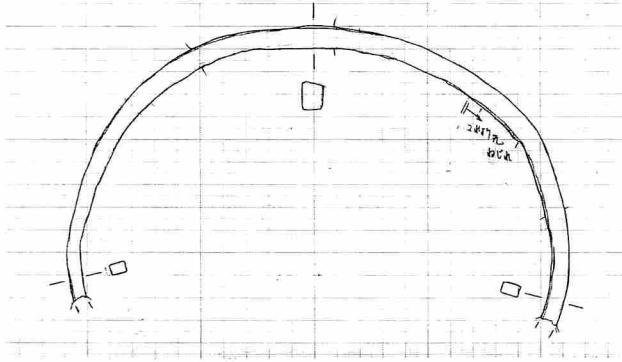
穀丁出土の手取釜については、伴出した陶磁器などから15世紀代の室町時代前期に年代が推定できる。なお、牛形城跡出土の手取釜についても、形状の共通性から室町時代に属すると推定できる。

近年、秋田県内でも中世の集落遺跡や製鉄関連遺跡の調査が行われてきたが、製品や鑄型などを含めて鉄製容器の出土例はきわめて少ない。むしろ商業活動が盛んになった中世においては、茶釜のような専門技術を要するものは、特定の産地生産が顕在化していく傾向がみられる。県外に例をもとめた結果、釜の生産地として福岡県の芦屋釜や、栃木県の天明釜があることを知つた。それぞれの型式を比較した場合、全体が簡素な作りであること、釜の表面に図柄が無いこと、口の作りがまっすぐに立ち上がることなどを考慮して、紹介した二つの釜は天明釜系のものであると推定できた。したがって青磁碗同様に交易よつて搬入されたものである可能性が高いといえる。

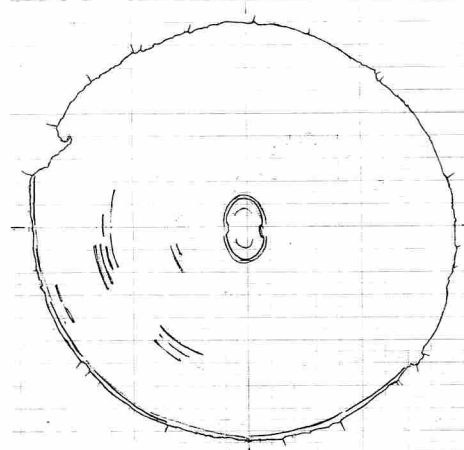
また、二つの釜は、県南部の山沿いの城跡と県中央部の海岸に近い砂丘地という異なつた環境で出土している。穀丁が港に近い集落遺跡であると推定した場合、武士階級から商人層へと茶の湯が広がっていったことを示しているとも考えられる。

参考文献

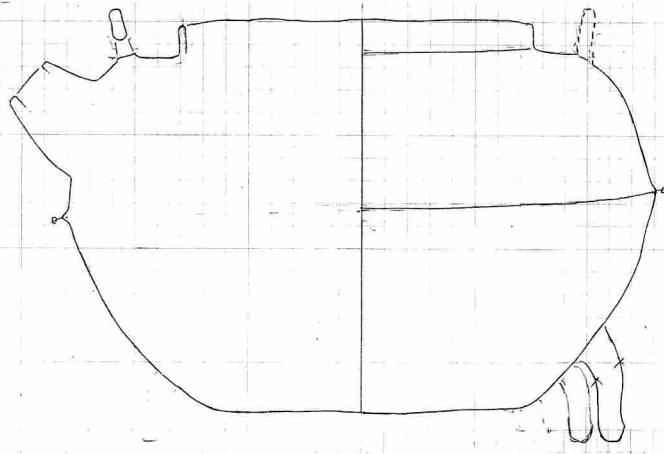
- ：庄内昭男，1982，秋田市飯島穀丁出土の中世遺物について，秋田県立博物館研究報告第7号
- ：佐野市郷土博物館，2007，天明釜第48回企画展図録
- ：秋田県教育委員会，2004，堂の下遺跡Ⅱ，秋田県文化財調査報告書377集



-取手-

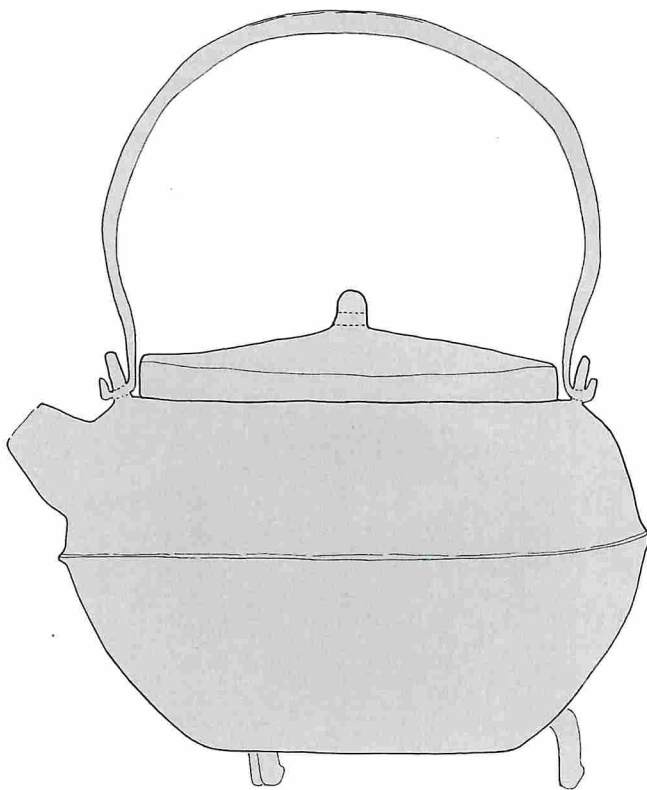


-蓋-

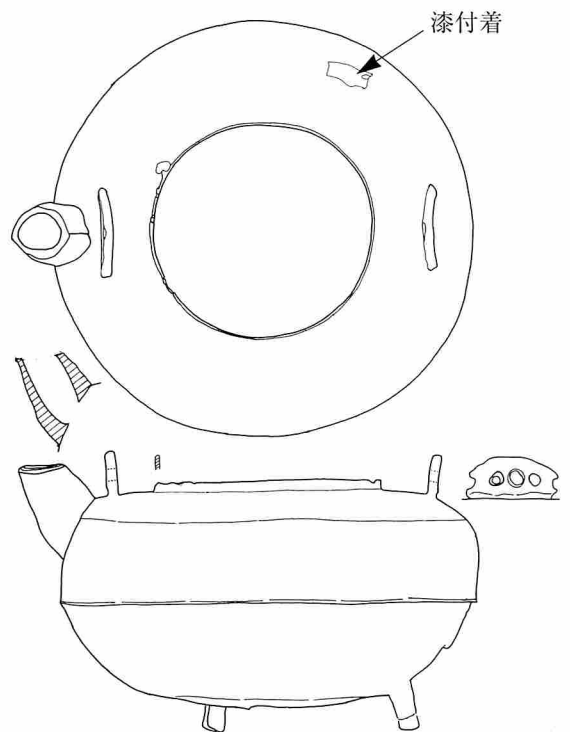


-胴体部-

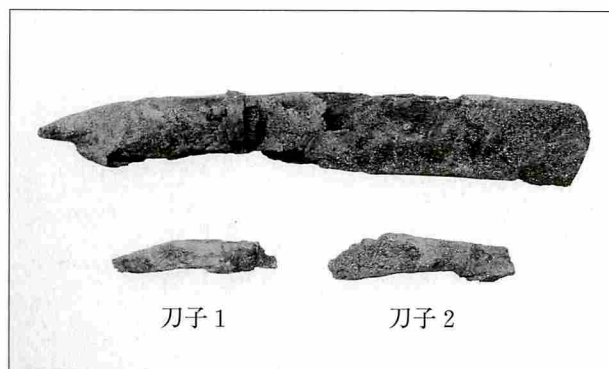
- 穀庁出土〈手取釜〉部位実測図 - $\div \frac{1}{3}$



穀丁出土〈手取釜〉復元図



牛形城跡出土〈手取釜〉実測図 $\div \frac{1}{3}$



刀子1

刀子2

穀庁出土〈鉞・刀子〉



穀丁出土〈手取釜〉



牛形城跡出土〈手取釜〉